

が十分でなかったように感じた。大変分かりにくい研究室の場所を教えるための配置がオープンラボの時間が開始されてから時間がたってからしか十分に配置することが出来なく、私が案内に立ってから何人もの方が道を尋ねてこられ、もっと早く案内できていれればと感じた。オープンラボの研究室を廻る人の数が多く、企画自体はいいものであるために研究内容以外の点で足を引っ張るような点があったのは個人的に残念だった。

懇親会にも幸運にも参加することができ、数人の方とも話す機会を得ることが出来た。かなりの熱気を感じ、この大会が成功しているという事を肌で感じる事が出来た(熱気の原因がどこから来ているかは定かではないが)。

今回の大会を通してかなりの貴重な経験ができた。学会のアルバイトに関する経験から、バーチャルリアリティ分野における体験まで、非常に有意義であった。この経験はいつか必ず役立つことがあると信じている。今回、アルバイトとして参加させていただき、大変感謝しています。ここに大会の委員の方々、他のアルバイトの方々、また大会に参加していただいた学会員の方々に感謝の意を表します。

- 今年日本 VR 学会と同時開催された - ◆ 第4回日本 VR 医学会学術大会 参加報告

小山博史

(東京大学)

第4回日本 VR 医学会学術大会(大会長: 京都大学名誉教授今村正之先生)が「VR 医学 - 臨床応用の現状と基礎研究の最先端 -」をテーマに本学会と並列して京都大学内で行われた。

午前中のセッションでは、東京都立保健科学大学の井上薫先生による脳血管障害患者さんへの上肢・認知機能評価に向けたバーチャルリアリティ技術を用いた医用システムの応用と評価に関する講演があり、その研究手法について注目が集まった。また、京都大学大学院情報学研究所の司隆史君他による遠隔ロボット手術を施行する上で必要となる情報ネットワーク基盤技術における QoS 制御手法についての発表と千葉大学大学院自然科学研究科の多賀谷昌志君他による医療技術訓練用のリアルタイムシミュレーションを実現するための弾性変形モデルの提案と実装について活発な質疑応答が行われた。

午後からは、「Distributed Mixed Reality の臨床医学への適応を目指して」と題して京都大学医学部附属病院医療情報部の黒田知宏講師から未来開拓研究事業「Telesurgery における通信システムと情報支援ネットワークの開発」についての研究成果を中心とした特別講演があった。

また、京都大学名誉教授の高橋隆先生からは「医療安全・訓練センター設立の提案」と題した VR 技術を用いた体験型訓練の欧米の医学教育の現状と国内でのセンター設立に向けた提言があり、日本 VR 医学会としても強く関係各所に働きかけることとなった。

本大会のワークショップとしては「腹部領域診療における virtual reality」が取り上げられ、国家公務員共済組合連合会立川病院の白神伸之先生、国立がんセンター東病院の中郡聡夫先生、京都大学医学部の前谷洋爾先生、東京女子医科大学の鬼澤俊輔先生、慶応大学の杉野吉則先生、京都大学大学院医学研究科の藤原俊孝先生らによる大変美しいバーチャルエンドスコーピー画像による診断の有用性についての講演があった。

本大会は、工学系の学会である日本バーチャルリアリティ学会との同時開催であったために工学系研究者と医学系研究者の交流に特に有益であった。工学系で開発された技術をいち早く医療に取り入れ日本発の新しい最先端の医療技術が今後生まれてくるためには、さらに医療における本技術の応用に関して相互の学会がさらに綿密な協力関係を築く努力を惜しまないことが重要であるとの印象を強くした大会であった。

◆ 次回大会長挨拶

舘 暲

第10回大会長(東京大学)



懇親会での次回大会長

第9回大会は、まさに驚きの連続であった。台風の直撃を受けながらも、みごと晴天のなか迎えることになり、美濃先生、横小路先生の日ごろの心がけにまずは敬服。会場となった京都大学の時計台。古さと新しさが見事に調和し、講堂から大きなガラスを透かして

見る初秋の大学構内は明るく輝いていた。プログラムも、学術発表は無論のこと、機器展示と作品展示を含め、内容もレベルが高く、ゆっくりと堪能できる企画で感嘆。特別講演では、「バーチャル」は、「即」であるという説に大いに共感し、「バーチャルリアリティ」を「即現実」と訳してはという案まで飛び出すに至る。用語委員会には、大変重要な宿題が課せられたと言えよう。懇親会では、高橋先生の舞妓さん、そのVR的考察に、またまた驚嘆。ということで、驚きの連続のなかに真理の見え隠れする、誠に素晴らしい含蓄のある大会であった。

ところで次回大会は、実に第10回にあたる。月日の速さには、ただただ驚かされる。学会の設立が、1996年5月27日。その年の10月に、第1回の大会を行ったのを皮切りに、爾来、名古屋、札幌、奈良、つくば、長崎、東京、岐阜、京都とまわって来年が10回目の節目となる。いわば、学会、この10年のまとめの時期を迎えたといえる。そこで、「VR:これまでの10年、これからの10年」というテーマを掲げて、この節目の大会を企画したいと考えている。

2005年の9月27日(火)から29日(木)、東京大学の安田講堂と工学部で開催する。30日(金)には、日本VR医学会を共催する形で第9回から始まった連携も継続する。懇親会企画は、頭を悩ませているものの一つであるが、第10回にふさわしい企画とするべく、川上、稲見の両幹事はじめ実行委員会で鋭意考慮中であるので是非期待していただきたい。バーチャルは、言うまでも無く、現実のエッセンスである。自然を注意深く観察し、エッセンスを見出し、表出する人間の英知を、技術、芸術、学術の立場から展開して行きたいと考えている。会員の英知を結集した大会にすべく、皆様の絶大なご支援、ご協力を御願ひする次第である。

◆おわりに (編集後記)

山澤一誠

広報担当 (奈良先端科学技術大学院大学)

各委員からの報告原稿がほぼ集まり、この原稿をまとめています。これが広報としての最後の仕事です。皆さんからの報告どおり、今回の実行委員のチームワークはよく、無事に大会が終わってほっとしています。来年は東京での開催です。また皆さんとお会いできることを楽しみにしています。